ハーレムバンディット

HAREM BANDIT

竹内けん
挿絵：saraki

試し読み版

2DB
二次元ドリーム文庫

ハーレムシリーズの世界

グリンカムビ
ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
ベリージャム
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エバーグリーン
エクスター
ラグナイト
レヴィ
ライオネル
セルベリア
ザウルステール
ガラテイア
カーリング
ヒューリアス
バロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

登場人物紹介

CHARACTERS HAREM BANDIT

タイターニア

現国王グランベリーの姪でナウシアカ王国随一の戦姫。八本の飛翔剣を操ることができる才女で軍略にも長じる。

マグナス

隣国シュルビー出身の木刀使い。道場で育ち二人の兄がいる。無法者だが硬派な男。

ムーン

寒村ジルヴィの村長の娘。マグナスを戦いの渦中に引き込んだ美女。

オルタシア

タイターニアの幼なじみで彼女の軍の副官でもある。彼女を心から崇拝しており、それ以外のことは眼中にない。

第一章　勇者と呼ばれて　009
第二章　山賊と呼ばれて　050
第三章　女王様の下僕　088
第四章　駆け落ち　121
第五章　花嫁泥棒　160
第六章　雪の女王　205

突然、勇者などと呼ばれて、美女美少女に迫られて苦悶する男マグナスは、このとき二十四歳。

ナウシアカ王国の隣国シュルビーにある剣術道場の三男として生まれた。

父親はラバンチオといって、武器に魔法をこめて戦う魔道剣『聖光剣』の一派を収めた人物らしい。それが『青輝流』という看板を掲げて、道場を開いた。

とはいえ、所詮は町道場。近所の子供たちに教える程度であり、それほど大きな道場ではない。よって、決して裕福な家庭というわけではなかった。

まして、兄たちもいるわけで、三男など必要のない存在だ。自分の居場所は自分で確保しなくてはならない。

兄たちに負けてなるか、と必死に頑張った結果、武芸の腕だけはメキメキと上がり、兄たちも、「あいつには勝てない」と言わしめるまでになった。

とはいえ、道場を継ぐのは長兄だ。そんなことは生まれたときから決まっている。

結果、力を持て余したマグナスはいわゆる非行少年の道に走った。

街で喧嘩三昧。腕っぷしだけは立ったから、街の悪ガキどもをまとめ上げ、粋がって愚連隊のようなものを組織するに至った。

父親や兄たちの影響か、義侠心はあり、曲がったことはしない。いわゆる硬派を気取るあらくれ者集団である。

無法は無法だが、「強きを挫き、弱きを助ける」といったタイプの好漢として名声を博した。

金持ちで貧乏人を蔑ろにするやつを嫌い、貧乏人の診察を断った医者を懲らしめるといった行いをして、街の衆の喝采を浴びせた。

街のヤクザ者も、マグナスには屈した。というよりも、マグナスのシマにしてしまった、というのが正しいだろう。

父親や兄たちも、そんな問題児の振る舞いに迷惑しながらも、かわいがってくれた。

若く腕っぷしがあり、親分肌。若い連中の面倒見もいいのだから、自然と女にもてるほうだったとは思う。

初体験は道場の隣に住むお姉さんで、なにがなんだか分からないままに納屋に連れ込まれて、女の抱き方を優しく教えてもらった。彼女はのちに長兄の奥さんとなり、複雑な気分を味わったものだ。

その後も、不良娘とタイマン勝負をして、盛り上がってそのままやってしまったこともあるし、街の不良どもの頭として、肩で風切って歩いていると、勝手にのぼせ上がった町娘が恋文を送りつけてくることがあったので、適当に遊んでやった。

将来を言い交すほどに深い仲にはならなくとも、女には不自由しない生活を送っていた

といえるだろう。
そんな好漢の存在を知って、隣国からマグナスを訪ねてきたのが、ジルヴィ村の村長の娘ムーンであった。
彼女はマグナスに切々と訴える。
「我々の村は悪代官に支配され、年貢は高く、労役として村の若い男はみな連れていかれてしまいました。このままでは村は滅びます。どうか助けてください」
ナウシアカ王国というのは、いささか特殊な風土であった。
北と西に北海があり、東と南にターラキア山脈に囲まれた陸の孤島なのである。
そのうえ海から吹き寄せた湿った風が、山脈にあたり大量の雪を降らすため、永久凍土といわれている。
交通の不便な土地ゆえだろう。代官の自治権力が強い。そうなってくると、権力を悪用する輩も出てくる。
その窮状を聞いたマグナスは、救援を快諾し、ただちに手下三十人余りを引き連れて旅立とうとしたが、事情を知った次兄に諌められた。
「調べてみると、ジルヴィ村にいるのはたしかに悪代官だ。しかし、代官は代官だぞ。おまえがいままで喧嘩してきたやつらとは意味が違う。代官を倒すということは国家に反逆するということだ。頭を冷やせ」
次兄は町で、寺子屋をやるほどに頭のいい人で、その助言をマグナスは信頼していたが、

このときは止まらなかった。

「頼まれたからにはイヤとはいえない。まして美人が泣きついてきたんだぜ。損得勘定を抜きにして、自分を頼ってきた存在を助ける。それが漢ってもんだろ」

どうしても行くと言って聞かないマグナスを、実家は勘当した。これは次兄の策である。もしものときに家族に面倒をかけるな、ということだ。

「それから行くならおまえ独りで行け。あんなガラの悪い連中をぞろぞろ引き連れていったのでは目立って仕方がない。それよりはおまえ独りで行って暗殺するほうがまだ成功の可能性はある。そして、代官を斬ったらただちに逐電しろ、いいか分かったな。ここにも帰ってくるな。どこか遠国に逃げろ。そうすれば追っ手も来まい」

頭のいい次兄の策をよしとしたマグナスは、手下たちも説得して、独りでジルヴィ村に向かった。

（請け負ったからには、死んだってやる。それが漢ってもんだろ）

かくして独りでターラキア山脈を越えてジルヴィ村に入ったマグナスは、真正面から代官所に乗り込み、十人ほどの役人をぶっ飛ばしたのち、見事、悪代官を打ち取った。

その結果、村はお祭り騒ぎとなり、マグナスの前には裸の美女が五人も尻を突き出し、陰阜を割って、処女膜をさらしている。

※

「……ごくん」

裸の美女美少女五人の桃尻とその狭間を覗き込み、マグナスは生唾を飲んでしまった。
蜜に誘われる蜂の如く、ふらふらと寝台へと近づいていく。
(兄ちゃんは事がなったらただちに逃げろって言っていたけど、今夜ぐらいはゆっくりしてもいいよなぁ)
自分自身を説得させながら、寝台の傍に立つ。
(どれもうまそうだ。どのオマ〇コもおちんちん突っ込んだらキュッキュッと締めてくるだろうな。いや処女だからな。ギッチギチに締めてくるだろ。うわ、想像しただけでチンポがいてぇ♪)
童貞のとき、男は女体に好奇心を刺激され、その神秘性に憧れる。
それでいて、女の味を知ったら知ったで今度は、女体の気持ちよさをより具体的に想像できてしまい、より女の誘惑に弱くなるものだ。
「い、いいんだな。本当にやっちまうぞ」
五つの女尻を見下ろしつつマグナスが上ずった声で確認を取ると、女たちのほうは意外と余裕の態度で華やかに笑う。
「はい。ぜひ、わたしに女の悦びというものを教えてください」
「強きおのこにやられるのは女の夢。さぁ、遠慮なさらずざくっとお願いします」
「若い身空で、男に愛されないというのは寂しいものです」
「ガンガンやっちゃってください」

「わたしたちは発情した牝。おちんちんのことで頭いっぱい」
女にとってもっとも恥ずかしいだろう肛門をさらし、さらには陰唇が開いた状態。そこから立ち上る香りは、否応なく男を惑わせる。
「それじゃ、おまえらの望み通り、まず処女膜の有無を確認させてもらうぜ」
我慢の限界に達したマグナスは、両手を伸ばすとまずムーンのむっちりとした尻を掴んだ。そして、両の親指を陰唇の左右にかけると思いっきり開く。
膣前庭があらわとなり、ぽっかりした膣穴が開き、ポツンとした尿道口まで見えた。
「ひっ！」
息を飲み、実を固くするムーンの粘膜に指を入れて、膣穴の四方に人差し指と中指を置き、思いっきり広げた。
「そ、そんな、そんなに剥かれては……っ⁉」
「剥かないとよく見えないんだよ。おまえの処女膜」
「それはそうですが、ああ、そんな覗き込むなんて……」
羞恥に身悶える女を押さえつけ、陰唇を剥けるだけ剥き拡げてしまった。意図したわけではないが、副産物として包皮の中から赤い陰核が飛び出してしまった。赤い肉芽がニョキッとそそり立つ。
そんな陰唇の奥にマグナスは顔を近づける。
ぷ～んと濃厚な牝臭が鼻腔を打った。

「たしかに膜があるな。大きな穴と小さな穴、二穴型というやつだ」
「ああ……、これは……よ、予想以上に恥ずかしいぃ♪」
羞恥の悲鳴が甘く蕩けている。女には被虐の悦びというものがあるという。恥ずかしいがゆえに、性的には大いに高まるのだ。
トロトロトロ……。
薄い膜の二つ穴から、透明な蜜があふれだし、滑らかな白い内腿を一滴流れ落ちた。
「おいおい、俺は触っただけなのに、ずいぶんといい濡れっぷりだな」
マグナスの嘲笑に、ムーンは項まで赤くする。
「そ、それは……ご、ごめんなさい」
処女膜などという普段絶対にさらすことのない部分を視姦され、女体が興奮しないはずがない、ということだろう。
膣穴といわず、濡れた媚肉全体がヒクヒクと痙攣している。
(もうダメだ。我慢できねぇ)
剥きさらされた女の花園に、マグナスは顔を突っ込んだ。そして、陰唇を口に含むと、ジュルジュルと吸い上げる。
姿勢的な問題として、マグナスの鼻先は女の肛門近くに入ったが、特に不快な臭いはしなかった。
「ひぃ、ああ、す、吸われている！　吸われている！　わたしのオマ〇コ吸われている！」

ペロリ！
少女の粘膜を一舐めする。
「はぅ！」
ビクリと電流でも流されたかのようにオルタシアの細い身体が震える。
「もっと舐めるんですわ。もっと舐めるのですわ。もっともっと舐めるんですわ。ああ、そ、そこ、そこ、そこですわ。もっともっと舐めるんですわ」
どうやらオルタシアはクリトリス派のようである。薄皮に包まれた陰核を舌先で舐めてやると、泣きそうな声で喘ぐ。
「ああ、いいですわ。そこいいですわ、いいですわ、いいですわ、いいですわ！　ああ！」
男の顔に座り込んで、オルタシアは悶絶する。
熱い女蜜がとめどなく溢れて、マグナスの顔を覆っていく。
（こいつって、やっぱり気位高いから、オナニーとかしないんだろうな）
そのせいで前回の刺激が忘れられなかったのだろう。再びマグナスに陰部を押し付ける機会を狙っていたに違いない。
（まぁ、健康な女なら性欲あって当然だからな）
なにせ村の若い娘百人と関係を持った身だ。どんなに楚々とした顔をしていても、牝は牝だということを、骨身に沁みて実感している。
（これでこいつの気がすむのなら、徹底的に舐めてやるか）

マグナスは百人の女たちで磨いたテクニックを使い、オルタシアの粘膜を隅々まで舐めてやった。

それから包茎クリトリスを口に含む。

「ひぃ！」

オルタシアの驚きの悲鳴を聞きながら、さらに包皮を剥いてしまう。そして、剥き出しになった小さな陰核を舌先で転がす。

「ひぃぃぃぃぃぃぃぃ!!!」

強すぎる刺激にさらされたオルタシアは、男の顔に座ったまま天井を仰ぎ、口角から涎を垂らす。

オルタシアが完全にイったところを見澄まして、陰核を開放してやる。

「はぁ、はぁ、はぁ……な、なんですの、いまの」

「気持ちよかったろ。いまイったんだよおまえ」

マグナスの言葉に、オルタシアは顔を赤くする。

「う、煩いですわ。下僕の癖に、生意気ですわ。身の程を知るんですわ。でも、まぁ、舐め犬としては多少役に立ちますわね」

男に、マグナスにイかされたという事実が、どうにも癪に障るのだろう。プンプンと怒り出したオルタシアは、不意にマグナスの下半身に目をやってギョッとする。

「な、なんですの。その股間のものはっ!?」

仰向けになっていたマグナスの股間は、ズボンを突き破りそうな勢いで、テントを張っていたのだ。
「仕方ねぇだろ。この場合は」
「ま、まさかあたくしに欲情していますの。汚らわしいですわ。ケダモノですわ。色魔ですわ。インモラルアニマルですわ」
男の顔面に、陰唇を押し付けて座ったまま、オルタシアは好き勝手に罵声を浴びせてくれる。
反論の言葉もないマグナスを他所に、オルタシアのほうは次第に女としての好奇心が頭をもたげてきたようだ。
手を伸ばすと、ズボンの中から逸物を引っ張りだす。
ビョンと外界に跳ね上がった逸物は、まさに怒張。オルタシアは畏怖した表情を浮かべる。
「こんな醜くて巨大な丸太のような代物を、女たちの可憐な穴にぶち込むなんてまさに犯罪ですわね。おまえにやられた女たちは、その恐怖から意のままに従っていたのかと思いますれば、哀れになってきますわ」
オルタシアの一方的で無茶苦茶な論理に、さすがにマグナスは反論する。
「いや、経験ないおまえに説明しても分からないだろうが、オマ〇コにちんちん入れられるってのは、女にとって至福のときなんだぞ」

「戯言ですわ。こんな醜いものをあそこに入れられるだなんて、想像しただけで身の毛がよだちますわ」
そう言いつつ、オルタシアは両手を後ろに置き、両足を前方に投げ出した。そして、ブーツを脱ぎ捨てると、蟹股になって、黒い靴下に包まれた両足の裏で逸物を挟んできた。
「うふふ、これって男の誇りなのでしょ。それを足蹴にされる気分はいかがかしら？　あはは」
気持ちよさそうにオルタシアが哄笑しているときだった。後ろで扉が開く。
ビク！
さすがのオルタシアも驚きに肩を竦める。
「声がすると思ったら、やはりオルタシアか。こんなところでなにをしているんだ？」
顔を覗かせたのは、タイターニアであった。
「オ、オネエサマ!?」
「ん？」
タイターニアは、オルタシアが尻の下にしているものを見る。
「それはマグナスか？」
マグナスの顔は、オルタシアのスカートの中に隠れていたが、体付きからわかったらしい。
「おまえら、いつの間にか仲良くなっていたんだな」

敬愛というか、愛する従姉の認識にオルタシアは震えあがる。
「ち、違いますわ。これはお仕置きですわ。この変態筋肉達磨のやつ、仕事をさぼって、男どもと遊びに行っていたんですわ。その罰を施行していたところですわ」
「ふ～ん、そうなのか。まぁ、頑張れ」
そう言って立ち去ろうとするタイターニアに、オルタシアは縋りつく。
「お待ちになってオネエサマ。誤解ですわ。誤解ですわ。誤解ですわ。あたくしはこのケダモノを憎み、侮蔑こそしておれ、好意など欠片も抱いておりませんわ。よろしければオネエサマもお仕置きに参加いたしませんか。こいつ体がでかいばかりで、この醜い棒を踏んでやると、ヒクヒクして震えますの。情けなくて、意外と面白いですわよ」
妹分の必死な言い分に、タイターニアは苦笑する。
「ふ、おまえはまったく、変な遊びばかりしたがるな」
タイターニアは部屋の中を横断すると、近くにあった机に腰を下ろした。そして、右足のブーツを脱ぎ出す。
素足になると、足の指を開いたり閉じたりした後、すっと伸ばした。
マグナスの逸物は、左右からオルタシアの足の裏で挟まれている。その上に飛び出した部分を足先で撫でられた。
「うっ」
ちょっと亀頭の裏側という、男にとって敏感なところを刺激されて、マグナスは呻いて

しまう。
「これでいいのか？」
「ええ、見てください。こいつでかい図体してヒクヒク震えていますわ。無様ですわ、滑稽ですわ、間抜けですわ」
歓喜するオルタシアを見下ろして、タイターニアは苦笑する。
「こやつはおそらく、この国で一番強い勇者だぞ。それを尻に敷くとはさすがはオルタシアだな」
「そんなことはありませんわ。オネエサマより弱かったですわ」
タイターニアは首を振る。
「あれは魔法を使ってだ。純粋な白兵戦では、こやつに勝るものはいない」
「そんな大した男とは思えませんけど……」
オルタシアはどうしても、マグナスを評価する気になれないようだ。
「お、一段とヒクヒクいっているな。おい、山賊！　おまえ、こうされると気持ちいいのか？」
「それは……はい」
「ふむ、まぁ、それなら続けてやるか」
完全無抵抗の男の亀頭の裏筋を、タイターニアの足の指がシコシコと上下になぞる。
「新参者とはいえ、手柄をあげてもなんら報いられることがなかったというのに、いまま

で文句を言わずに、仕えてきたご褒美だ」
マグナスの顔には、処女臭の溢れるオルタシアの陰唇がある。そして、その細い脚で逸物を挟まれた上に、亀頭の裏側を、タイターニアの右足の指先で撫でられたのだ。
いかに女慣れしているつもりの男も悶えずにはいられない。
「おまえ、百人もの女を抱いてきたのだろ。この程度で弱音を吐くのか？」
「いやでも、最近、やってなかったし」
マグナスの言い訳に、タイターニアは失笑する。
「なるほど、わらわの麾下に入ってからは、とんとご無沙汰ということか」
「はい。くっ、もう……出る」
「あはは、すごい震えていますわ。でかい図体して無様ですわ、無様ですわ、無様ですわ」
ドビュドビュドビュ――――ッ!!!
オルタシアの両足の裏に包まれた逸物の先端から白濁液が噴き出し、タイターニアの右足を脹脛近くまで汚す。
「キャー、オネエサマのおみ足が汚れてしまいましたわ」
悲鳴を上げたオルタシアは、タイターニアの右足を両手で押し抱くと、ペロペロと舐める。
あれだけマグナスの精液を飲まされたことを恨んでいたわりに、タイターニアの足にか

かった後だと問題ないらしい。
呆れた顔で見ているマグナスに向かって、タイターニアはにっこりと微笑む。
「どうやら、ようやくオルタシアもおまえのことを認めたようだからな。明日にでもしかるべき役職を用意してやる」

「道具を相手に恋愛することはないが、道具を愛でることは普通にあるだろう」
「……？」
戸惑うマグナスに、タイターニアは丁寧に説明する。
「孤閨をかこつ女たちは、バイブという道具で自らを慰めるのだろう。わらわも、おまえを肉バイブとして活用させてもらおう」
「いっ⁉」
「なにを驚く」
タイターニアは灰金色の髪を掻き上げた。
「おまえはわらわを大将と呼び、特別な女のように扱うが、王女という肩書を外せば、どこにでもいる女だぞ」
いや、大将が普通って、普通の定義広すぎだろ。とマグナスは叫びそうになったが、辛うじて飲み込む。
「わらわだってな。女の幸せが欲しい。結婚願望もあれば、性欲もある。だから、好きな男のおちんちんにむしゃぶりつきたい。セックス遊びもしてみたい。好きになった男のおちんちんに貫かれ、子種を宿したい、と思う」
「そ、そうですよね」
タイターニアも女である。そんなことは頭では分かっていた。しかし、改めて本人から

宣言されると、なぜか衝撃を受ける。
「貴様さえ来なければ、わらわはいまごろ、素敵な貴公子とラブラブな婚前交渉に臨んでいたやもしれぬ。それを台無しにした貴様には責任を取ってもらう」
政略結婚であるし、一度もあったことがない相手だ。恋心もなにもないだろうが、女として普通に夢は持っていたことだろう。
それをぶち壊されたタイターニアは、憤懣をぶつけるようにマグナスを仰向けに倒した。そして、その顔に跨ってくる。
「山賊、貴様はオマ〇コを舐めるのが好きなのだろ。好きなだけ舐めさせてやる」
どエスな表情で、見せパンを引きずり下ろしたタイターニアだが、その頬が紅潮しているのは紛れもない事実だ。
タイターニアはそのまま小用を足すようにしゃがみ込んできた。
予想はしていたが、結構な大洪水である。タイターニアとしても、痴情的な責めを楽しみながら興奮していたのだろう。いや、すでに何回かイってしまっているようだ。
「へいへい、大将の仰せのままに」
鼻先に濡れた陰部をさらされたマグナスに否応があるはずがない。素直に舌を伸ばした。
ペロリ。
「はぁん」
媚粘膜を一舐めされたタイターニアは、背筋をのけぞらせて鼻から抜ける甘い悲鳴を上

げた。
どんなに強気に振る舞おうとも、肉体は若い牝に過ぎない。性器を男に舐められたら、快感に震える。
ペロリペロリ。
男に下から舐められながら、口元に手をやったタイターニアはビクビクと震える。
「き、気持ちいいな。これは……はぁん、貴様に群がる女たちの気持ちが、理解できる。はぁん、そこに舌を入れるのか、ああん、深い♪　オマ〇コの中を舐められている。はぁん、オマ〇コの中を全部舐められているぅぅぅ」
男としてのサービス精神を刺激されたマグナスは、舌を思い切り伸ばして、子宮口を舐めるかのように差し込んで、グルグルと掻き混ぜた。
「はぁぁぁん、そ、そこ気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい」
強気に振る舞っていた女王様気質の女も、襲いくる肉体的な快楽の前には、理性が飛んだらしい。
恥も外聞もなく牝声を張り上げる。
(いやはや、ギャップが凄まじいな)
普段の強気で傲慢な立ち振る舞いをよく知っているだけに、いまの痴態は見応えがあった。調子に乗ったマグナスは、処女姫の秘密の穴を盛大にほじりまわす。
クチュクチュクチュクチュ……。

「もう、ダメ、ダメダメダメ、イクイクイクイクイク、イクぅぅぅぅぅぅ」
激しく牝声を張り上げた氷の王女様は、そのまま仰向けに倒れた。
後頭部に逸物の突起を受けたタイターニアは、慌てて頭をずらし、右手で逸物を愛しげに抱き寄せると、右頬に添えて溜息をつく。
「また大きくなっている。……暖かいな。おちんちんというものは」
「……」
「なぁ、山賊。貴様、わらわとやりたいか？」
どう答えるのが正解なのか、マグナスは迷った。そこで考えながら、精いっぱい正直な気持ちで答えた。
「俺はさ。喧嘩ならだれにも負けない自負があった。それが大将にタイマンで負けて、鼻っ柱を折られたわけだ。だから、忠義を誓うなんて口幅ったいことは言わない。大将のために死ぬことを決めた。大将がいまの王より、悪辣な女王となっても、俺はついていくつもりだ。まぁ、そこまで惚れている」
「き、貴様。オルタシアをはじめとして、あれだけの女をこましながら、なにを言うか！」
タイターニアが珍しく動揺の声を上げた。
「だから、あいつらと大将は別物だって言いたいんだよ」
「どう違う？」
「なんと言えばいいのかな。大将がやりたいのなら、喜んでお相手するよ。でも、大将に

その気がないなら、別にやらなくてもいい。俺はなにも変わらない。大将のために生き、死ぬだけだ」
マグナスの宣言に、タイターニアの顔がみるみるうちに赤くなっていく。
「まったく、単純な男だ。世の中はそう割り切れるものではあるまいに……」
大儀そうに上体を起こしたタイターニアは、両手を伸ばし、愛液塗れになっているマグナスの頬を挟む。
「なぜだろうな。家柄はない。爵位もない。顔もいいとはいえない。頭も悪い。教養もない。紳士でもない。優しくもない。女にもだらしない。ただ腕っぷしがたつだけの粗野な男」
「……それ褒めてないよな」
「当たり前だ。しかし、わらわは貴様に惹かれている。強いて理由を探せば、貴様のような男を他に知らぬからか？　まぁ、理由などどうでもいいか」
笑いながら吐き捨てたタイターニアは、そのまま顔を下ろし、マグナスの唇を奪った。
「うむ、ふむ、うむ……」
貪るような接吻。タイターニアは唇を左右にくねらせ、さらに舌を伸ばす、マグナスはそれに答えて舌を絡めた。タイターニアが上から覆いかぶさったため、唾液がマグナスの口内に流れ込んでくる。
長い接吻を終えて、タイターニアは顔をあげた。

「おまえのおちんちんが欲しい。よいな」
「大将の仰せのままに」
「よし」
頷いたタイターニアは、蹲踞の姿勢となって膝を左右に開いた。その股の下にいきり立つ逸物を添える。
肉刀の切っ先が、女の軟肉に触れた。
「あん♪　それにしても、おまえの逸物は改めてみると、本当に大きいな。太くて長くて硬い。こんなものを入れたら裂けそうだ。いや、オルタシアをはじめ、この村の女たちはみんな食っているわけだからな。わらわの中に入らない道理がないか」
なにやら自らを言い聞かせたタイターニアは、気合いをいれて宣言する。
「いくぞ」
「いや、大将。初めてなのに自分で入れるのは無理があると思うぞ。俺がリードしたほうがよくないか？」
マグナスの忠告を、タイターニアは跳ねつけた。
「うるさい。これはわらわの中の儀式だ。もはや後には引けぬと言うな。それに貴様に上になられるのは酌に触る」
「左様で……」
タイターニアの好きにさせるしかないだろう。実際、女が勝手にやってくれるのなら、

男は楽でいい。
グ――――！
タイターニアは必死に腰を落とそうとしているようだが、なかなか入らないらしい。持ち主と同じように、処女膜も相当に頑強なようだ。事前にクンニをして解しておいたというのに、なかなか通さない。
初めてなだけに、痛みで躊躇ってしまっている所もあるだろう。
（大将って見栄っ張りだったんだなぁ）
とおっぱいを揺らしながら涙目になって奮闘している様を見上げていると、その視線に気づいたタイターニアが叫ぶ。
「顔を見るな！」
焦ったタイターニアは、逸物を膣に添えたまま向きを変えた。
しなやかな背中が、マグナスの視界に広がる。
「ちょっと、貸せ」
唐突にマグナスの愛用している木刀を奪ったタイターニアは、両手で木刀を掴むと、床に突き立ててバランスを取りながら、気合いを入れて腰を落とした。
ブツン！
「くっ」
処女膜が突破されたたしかな手ごたえが、マグナスにも伝わった。城門さえ破られれば、

本丸まで一気だった。
ズブズブズブズブ……！
狭い隧道が押し広げられて、逸物が飲み込まれていく。そして、ドスンと行き止まりにたどり着いた。
「はぁぁぁぁぁん」
生まれて初めて子宮口を異物に押し上げられたタイターニアは、大きくのけぞり、大口を開けて喘ぐ。気位の高い顔が崩れて涎まで噴いてしまった。
「は、入った。入ったぞ。最深部までずっぽりと……」
痛みに悶えているようでありながらも、その声には女としての歓喜の色が混じる。
「大将、大丈夫ですか？」
「大丈夫だ。なんの問題もない。ああ、もはやこれで引き返せなくなった。わらわは貴様とともにいくしかない。孕んでやる。貴様の種を孕んでやる。貴様がわらわを女王にするということは、自分の子供を次期女王にすることと心得よ。これがわらわから貴様に対する最大の意趣返しだ」
なんとも滅茶苦茶なことを言っているのは、タイターニアが破瓜の衝撃で混乱しているということだろう。
「くっ、ダメだ。動けん。山賊、命令だ。わらわを気持ちよくしろ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

二次元ドリームノベルズ

とろ蜜美女めぐりの桃色バスツアー

幻想魔王シャイン・ミラージュ

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル！

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリーダム120%!?
ジャルにとらわれないドキドキ★ラブ

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

呪詛喰らい人師

キルタイム・コミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

異世界でチキる妹ちゃん

ハルキ

二次元ぷち文庫

あの人気作品の外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないキッチンベル！

「小説家になろう」の男性向けサイト「ノクターンノベルズ」から書籍化！

ピュア・キラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

姫騎士がクラスメート！

ビギニングノベルズ

二次元ドリーム文庫

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索